この阿修羅は天道の門近くに咲く草花に転生する
～風の時代に心を豊かに育む～

黍稷農季人

This Ashura would become a blooming flower near the gate of heaven in reincarnation.
～Growing up my own Mind in the Air Era～

Kibikibi Noukijin

雑誌『民族植物学ノオト』を創刊することにした際（2005）、創刊号巻頭言に、「もう一つの阿修羅として」と題して一文を記した。すでに 19 年を経ているが、まさに絵にでも描いたように、ぼくはこの通りの後半生を歩み、何とか此岸には恨みを残さずに、気持ちよく彼岸への旅立ちを迎えようとしている。これまでに、人生の先達として阿修羅の眷属を探してきた。なぜ改めてまた阿修羅かは、唐突ながら最近、見捨てられた雑穀 millets(lost crops, orphan crops)の研究に人生を過ごしたぼくは阿修羅の眷属ではないかということに、新たに気付いたからである。ぼくが思うに、阿修羅は人間としての苦しみを自らの課題として 4 億年も終始戦い（学び）に明け暮れた。人間道や畜生道だけではなく、阿修羅は天道も含めて、全ての六道に移動できる存在ではなかろうか。

全ては心の仕業、ぼくという人間の歴史時空は常時戦場、阿修羅界（修羅道）にあるようだ。現代のアニミストであるぼくは誠心誠意、公正を心掛けてきたが、菩薩の心（R.エイトキン老師）にはほど遠いので、やはり人間界（人間道）に属するのではない。宮沢賢治（1923）は心象スケッチ『春と修羅』中の 1 編「春と修羅」で、「はぎしり燃えてゆききする　おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。まだ学生の頃であったか、読みふけったジョージ秋山（1970）の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都（1995）が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である（図 1）。

アシュラ

アーリア人のインド・イラン共通の時代にはアスラ asura とデーバ deva はともに神を意味していた。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。住所は海底や地下とされる（定方、世界宗教大事典 1991）。

今では、阿修羅 asura は八部衆に属する仏教の守護神である。六道の阿修羅道に住む。一般的には、サンスクリットのアスラ（asura）は歴史言語学的に正確にアヴェスター語のアフラ（ahura）に対応し、おそらくインド-イラン時代にまでさかのぼる古い神格であると考えられている。古代インドでは生命生気の善神で、呼称はサンスクリットの asu（息、命）に由来するが、悪者とみなされるようになってからは、「a」が否定の接頭語と解釈され、非天、非類などと訳された。

仏教に取り込まれた際には仏法の守護者として八部衆に入れられた。六道のうちの天道、人間道、修羅道を三善趣（三善道）といい、畜生道、餓鬼道、地獄道を三悪趣（三悪道）というが、三悪趣に修羅道を加えて四悪趣（四悪道、四趣）とする場合もある。法華経では阿修羅は悪として書かれることはごく少なく基本的には三善道の 1 つもしくは八部衆の 1 つとして描かれており善趣の存在である。

阿修羅は帝釈天に歯向かった悪鬼神と一般的に認識されているが、阿修羅はもともと天界の神であった。阿修羅が天界から追われて修羅界を形成したのには次のような逸話があ

る。阿修羅は正義を司る神といわれ、帝釈天は力を司る神といわれる。阿修羅の一族は、帝釈天が主である忉利天に住んでいた。阿修羅には舎脂という娘がおり、いずれ帝釈天に嫁がせたいと思っていた。しかし、その帝釈天は舎脂を力ずくで奪ったので、それを怒った阿修羅が帝釈天に戦いを挑むことになった。帝釈天は配下の四天王などや三十三天の軍勢も遣わせて応戦した。戦いは常に帝釈天側が優勢であった。一説では、阿修羅は正義ではあるが、舎脂が帝釈天の正式な夫人となっていたのに、戦いを挑むうちに赦す心を失ってしまった。つまり、たとえ正義であっても、それに固執し続けると善心を見失い妄執の悪となる。このことから仏教では天界を追われ人間界と餓鬼界の間に修羅界が加えられたともいわれる。修羅道は六道の一つ。妄執によって苦しむ争いの世界。果報が優れていながら悪業も負うものが死後に阿修羅に生れ変わる。人間道の下とされ、天道・人間道と合わせて三善趣（三善道）、あるいは畜生道・餓鬼道・地獄道の三悪趣と合わせて四悪趣に分類される。五趣に修羅道はなく、天道に含まれていた（Wikipedia など）。

長谷川（1987）によれば、アシュラ阿修羅はインド神話における鬼神の一種で、サンスリット語 asura の写音、アーリア人のインド・イラン共通時代にはアスラとデーバ deva は共に神を意味し、彼らが分かれて定住してからはインドではアスラが悪神を、デーバが善神を意味するようになった。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。神 deva と阿修羅の闘争はインド文学のよいテーマとなった。阿修羅は初期仏教の五道にはなく、阿修羅は天道や餓鬼道に含まれていたが、大乗仏教になって新たに修羅道が派生して六道になり、三善趣の下位に位置付けられた。阿修羅は原初の古い神であり、ヒンドゥーでは敵対する鬼神となり、佛教では改心して守護神に位置付けられている（Wikipedia、世界宗教大辞典 1991）。アシュラは本来系統の異なる神であって、古くは邪悪な存在とはされておらず、たとえば、乳海撹拌の時はヴィシュヌ神らと協力しており、リグ・ベーダの暴風雨神ルドラもアシュラの一種であり、否定的な意味はなかった。インド神話が先住民との闘争史を反映しているのならば、アシュラはアーリア人に対抗した種族と考えられる。

ぼくは自然崇拝、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとても興味をもつようになった。ひろさちや（2005）は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅の心象を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかったと推察する。

こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたいぼくも一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない抵抗こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、またぼくたちの歴史である。日本列島に居住してきた多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展を目指してきた。雑誌の表紙にした門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて 2 体飾る。門男は山の神の使いで、農耕の智恵と畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、

共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。本雑誌の表紙絵は研究室卒業生三輪誠が原図を書いた。

そこでジョージ秋山の『アシュラ』（1970～1971、少年マガジン）をもう一度読み直すことにした。アシュラの歴史背景は室町時代の終わり、乱世の頃、飢饉の最中で庶民は飢餓線上を彷徨っていた。

室町時代末期の戦乱と飢饉の最中にある村で、アシュラの実父は散所太夫で、身ごもった妻藤乃を放擲した。彼女は赤子のアシュラを生んだが、鬼狂女になり、飢えのあまり吾子さえ喰おうとした。捨て子アシュラは放浪を生きぬいた。アシュラは自分を導く乞食法師が差し出した彼の腕を食べることができなかった。散所太夫はアシュラが自分の息子であることを知り、後に罪深い所業を悔いた。狂母は息子アシュラを探し求め、病を得て余命いくばくもなく、やっと再会したが、アシュラは母の末期においてさえも、彼女を容易に許せなかった。しかし、アシュラは死した母に百合の花を手向け、生まれてこなければよかったぎゃと慟哭した。ここでアシュラは母と自分の人生を受忍したのだろう。哀しくも父母と子が心で許し合ったのかのようだ。アシュラが阿修羅として生きたのか人間になって死んだのか、その後は描かれることなく終わっている。

もう一つ彼の作品『The Moon』（1972～1973、少年サンデー）を思い出して、確かに最終場面を切り抜いて保存しておいたはずなので、書庫を探したが発見できずに、これも古書を注文した。その最終場面とは、ケンネル星人が地球との友好関係を求めたにもかかわらず、彼らを私欲で利用しようとした木の国屋が星人を殺した。星人は報復として地球が一年で亡びるというカビ発生機械を設置した。純粋な心の少年サンスウがカビ発生装置を破壊しようとしてカビに蝕まれてもがき苦しみながら、ムーンの名を叫び、一方、ムーンは何もできずに涙を流すのであった。この先に恐らく未来はなく、人類は滅亡に向かい、このデストピアはまさに絶望で終わっていた。ムーンは新たなカミとして造られた巨大なロボットで、純粋な心を持った少年たち 9 名が合意した時にしか操作ができない。

ぼくが大学院生で実験の合間に、水俣病患者やその支援者たちとともに抗議活動をしていた頃に、少年サンデーに掲載されていたのだ。ここには公害、連合赤軍や三島由紀夫らの行動が変形されて時代背景に描き込まれている。権力の圧倒的暴力に挑発されて、ささやかな暴力で対抗しようとした学生運動の戦術が、市民ばかりか、当事者である学生たちからも信頼を失い、見放されてしまった。この学生運動の敗北の歴史的責任はとても重い。ガンジーのように非暴力・不服従を戦術として、忍耐するのが良かったとは思う。それでも、ぼくはさらに 50 年近くも生きてきた。ぼくはこのサンスウの心を受けて、象徴としてのカビ発生装置を止めようとしてきたのだろう。そのような自分の人生にささやかな誇りこそあれ、何ら不満はないが、いくつかの悔しさはある。

さらに、孫子が読んでいた『鬼滅の刃』（吾峠呼世晴 2016～2020、少年ジャンプ）のアニメーションのストーリーからからインスピレーション inspiration を受け止めた。大正ロマン・デモクラシーを背景に、東京時代中期、主人公、竈門炭治郎は妹の禰豆子を人間に戻そうと剣の修行に励み、鬼殺隊員として血鬼術を縦横に操る鬼たちと戦った。禰豆子は炭焼きを職業とする竈門家の長女で、母、父が他界していたので、弟妹たちと暮らしていた。一夜、炭治郎が町に炭を売りに行き家を留守にしたときに、一家は鬼の長、鬼舞辻無惨に襲われ、殺されてしまい、唯一人禰豆子は鬼となって生きていた。禰豆子は鬼になったにもかかわらず、兄の愛情を認識していたので、鬼には成りきらず、人喰いを自制でき、

兄が約束した通りついには人間に戻った。鬼人として兄の背負う箱の中で眠り、時としてに出て、兄を助け鬼との闘いに生きた。

ここに出てくる鬼たちは飢餓によってだけではなく、強くなり人間や鬼を支配する権力を得るために人間を楽しみで沢山喰うのである。彼らは想い違えた家族への心に飢えており、それを権力で置き換えていたのである。鬼より恐ろしいのは人間の心の闇に深く潜み澱む毒である。毒を溜め込んだ人間は残念なことに実在している。鬼は見た目が怖く。毒人間は見た目ではわからない。鬼は人間の心の闇の中に隠れ住んでいる。恐ろしいのは鬼よりも人間だ。何故なら、鬼の姿は見るからに恐ろしいが、人間の姿は神に似せてあり、一見では優しいか恐ろしいかはわからない。

図 1. 阿修羅に関連した作品

半世紀ほど前に描かれた『アシュラ』は恐ろしい描写で、神奈川県では、PTA からの意見で有害図書指定された。ところが、もっと恐ろしい描写が出てくる『鬼滅の刃』は有害図書指定などではなく、子供から大人まで、爆発的に視聴・読者を得ている。個別作品の違いやアニメ同伴など美的な表現や発信方法にも大きな違いはもちろんある。

一方、別の視点で、大正期という時代背景も関わっているとするのなら、それはどのようなことなのだろうか。恐ろしい世界大戦の狭間の大正ロマン・デモクラシーの陰に隠され、蠢いていた鬼たちに重ねてみているのだろうか。ちなみに、任意団体 NPO の鬼殺隊士

は、廃刀令（1876）後の大正時代に剣の道に励み、鬼退治を行っているのである。鬼の力に勝てはしない絶望があっても、信頼できる隊士間の友愛に依拠して抗うことに共感しているのだろうか。主人公の竈門炭治郎も阿修羅なのだろう。これらの鬼よりもっと怖い鬼は人間の心の闇に棲みついているのだ。完結編では、鬼を滅した人間は現代に輪廻転生して楽しく暮らしており、ハッピーエンドになっていた。

現代は後世になれば歴史区分として東京時代と呼ばれるのだろう。ジョージ秋山が『アシュラ』や『The Moon』を描いた時空と、吾峠呼世晴が『鬼滅の刃』を描いた時空にはおおよそ 50 年の経過がある。前者は大学（知的権威）が国権力との紛争で敗退、同時に公害も激甚化する状況にあった。一方で、後者の現在はどのようにとらえたらよいのだろうか。沈黙したままの大学は抑圧され学問の不自由に甘んじて、原子力発電所の放射性物質公害、権力犯罪の腐敗構造にさえ異議を言わなくなった。市民社会、大方の世間も代替の権力構成を求めながら、それを見つけ出せずに不憫をかこっている。吾峠は絶望の彼方に、希望を見つけたのだろうか。

COVID19（一本鎖 RNA ウイルス）への恐怖では人間所業の醜悪をさらけ出したが、一方で恐怖に抗い美しい心性を輝かせてもいる。たとえば現場の医療従事者や廃棄物処理従事者は恐怖と闘いながら、誇り高く社会的責任を遂行しており 経済格差や属性差別も一層露わになり、しかし。熱い感謝を示す人々はとても多い。救援を受けながらも、過剰に心無い応対をする人々も少しはいた。感染防止のために会社も学校も自宅待機になり、家族として寄り添った時間ができた。一時の社会的空白が不幸中の幸いとして、次第に薄弱となっていた家族の情愛を深めることができたことだろう。

人生と学問

ぼくは、学問は孤独な一人遊びと見つけた。学問には先達の長い系譜があるので孤立はしていない。しかし、孤独にならないと、先師や先達の努力の成果（理論仮設）を、新たに明かされた事実を追加して、深く根底的 radical に考えて、ほんの少しでも加筆修正を試みることができない。権威に甘え、縋るのでは学問は展開しない。

ヒンドゥー教では人生の理想的な過ごし方として四住期を誂えている。ぼくとしては幼児期を加えて、心の構造と機能と関連付けて、次のように考えてみている。ちなみに幼児は遊び惚けることが生業仕事である。

幼児期：天性の遊び心　　五感で生きる
学生期：修行としての学問　　直感を得る
家住期：仕事としての学問　　直観を磨く
林住期：趣味を遊びに昇華し、学問は遊びに統合される。良心を知る
遊行期：解脱に向かう。

ヒンドゥー教の教えでは、学生期には師に絶対的に服従し、ひたすら学び、厳格な禁欲を守らなければならない。このような学びの期間が過ぎると、次は家住期である。家住期では、親の選んだ相手と結婚して、職業に就いて生計を立てなければならない。そして子どもを育てるのが大切で、このことによって子孫を確保し、祖先への祭祀（さいし）が絶えないように心がけなければならない。この家住期は世俗的なことが重要とされるのであ

る。現代人であれば、これで人生は終わりとさえ言えるのだが、ヒンズー教の場合にはさらに二段階が加わる。

第三の林住期は、これまでに得た財産や家族を捨て、社会的な義務からも解放され、人里離れたところで暮らすことができる。このような過程を経て、最後の遊行期は、この世への一切の執着を捨て去って、乞食となって巡礼して歩く。ヒンドゥー教徒たちは、永遠の自己との同一化に生きようとしたのである。

『アシュラ』(1970～1971) と『鬼滅の刃』(2016 ～ 2020)、この二作品への世間の対応に大きな違いがあった。これらの比較によって、心の構造について考えてみたい。両作品共に惨たらしい場面が頻繁に出てくる。前者の人間は醜く、後者の鬼は悍ましくも、美しくも描かれている。このため後者は少女や若い母親層にも人気でアニメーションや小説も含めてベストセラー第一位である。この二つの漫画、COVID-19 の恐怖の中で、この両作品を家族の物語として読んでみた。より惨い場面がある後者の方が、子どもはともかくとしても、それでも子育て世代の女性から、非難も受けずにむしろ大好評であるのはいくつかの要因があるのだろう。前者の出版年代よりも後者の現実社会に鬼が多くいる、 あるいは人の生死もゲーム感覚になったからなのだろうか。

その上、追い打ちをかけて COVID19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID19 の恐怖に脅え、それを利用して、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろう。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるようにカミガミ（自然）に祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽だが、希望を探し続けたい。過去・闇世の澱みは陰湿で今でも絶望に沈んでいる。何が正義で、何が邪悪かを問うても、人々の間には強固なバカの壁があり（養老 2003)、空虚にも、越えることはほとんどできない。それでも阿修羅は永遠に抗い、挑み続けるべきなのだろうか。すでに 4 億年も抵抗してきたと、阿修羅王は言っている。

COVID-19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID-19 の恐怖・脅えを利用して、人心を惑わし、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろう。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるように祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽、仮想だが、希望を探し求め続けたい。

地祇と祖先神

ある週末に、孫たちの七五三で静岡の浅間神社や東照宮に行った。不思議な方と一瞬言葉を交わしたので、「お手水の地祇」というような一文を課題（良心、教養）に重ねて考えてみた。言葉に誠がなく、行動に実がない大方の日本人に異議を申し立てたい。

老女が自転車を引き歩いてきて、ぼくの前で立ち留まった。孫たちの記念写真を浅間神社でお願いして撮っていたから、それを遮らない配慮をしてのことだ。お礼を言って、近所に住んでおいでなのかと問うたところ、鳥居前の信号機を渡ったところだという。そこは仲間見世の商店街だから、お店をやっているのかと重ねて伺ったところ、意外な答えであった。彼女は神社の手水（トイレ）の掃除をしている。信号が変わるのを待つ間、彼女の話を聞いた。厠の使い方が男女とも行儀悪く、日本人の道徳的退行を憤っていた。特に女

性がひどく、男性も清掃中の老女に配慮がないとのことであった。トイレ掃除はとても大事な仕事である。汚いトイレは使いたくないのに、大方の使用者が礼儀をわきまえずに汚す。それを掃除する老女を蔑視するような態度をとるそうだ。やむを得ない緊急時でも、配慮し、お礼は述べるべきだ。

浅間神社には少彦名命の社もある。少彦名命は常世の国で石を示現する小さなカミで、粟茎に弾かれて淡島より常世国に至った。本質は粟の穀物霊であり、生成神神産巣日神の子とされる。大己貴神（大国主命）は、この常世の穀霊と合体して国造りに成功する。農業、酒造、医薬、温泉のカミとして信仰されている。ちなみに、木俣の神は大国主命と八神姫の長男であったので、私は高天原の天孫族の神々にくにを奪われた出雲族の子孫である。それでも楠一統として南朝に味方して敗走し、岐阜に逃げたようだ。ただし、これも神話であり、史実については確証がない。

心の構造と機能

心の構造と機能についての詳細は木俣（2021）で記した。本論稿の理解のために、次に概要を示す（図 2 および図 3）。

ぼくは国内外の自然を探索するうちに、自然という概念には原生自然、文化的な自然および自然観があると考えるようになっていた。岩田（1986）は、自然には三相があり、これらは原生自然、文化としての半自然および心の中の真の自然であると言う。ぼくの考えていたこととまさに重なり合ったので、ELF 環境学習過程の基本学習プログラムに位置づけができた。次に、ミズン（1996）の述べるチンパンジーから現生人類までの心の構造を形成する、諸知能の進化の論考に啓発されて、環境学習過程に心の構造を重ねることができた。偶然ながら、ミズンが大聖堂モデルという結論を得るに至ったサンティアゴ・デ・コンポステーラにはぼくも観光旅行でいった。

さらに、最近数年に経験したムラ撥撫のストレスを解き明かそうとの学びで出会ったスタウト（）によって、良心という第七感があり、人類はこの感覚についてはまだ未熟だという見解に啓発されて、心の各知能間の認知流動性が心の諸機能を高めるのだと理解した。ミズンの言う小聖堂の壁を通過するために認知流動性を高める必要がある。これが環境学習の根底的な理論と腑に落ちるに至った。

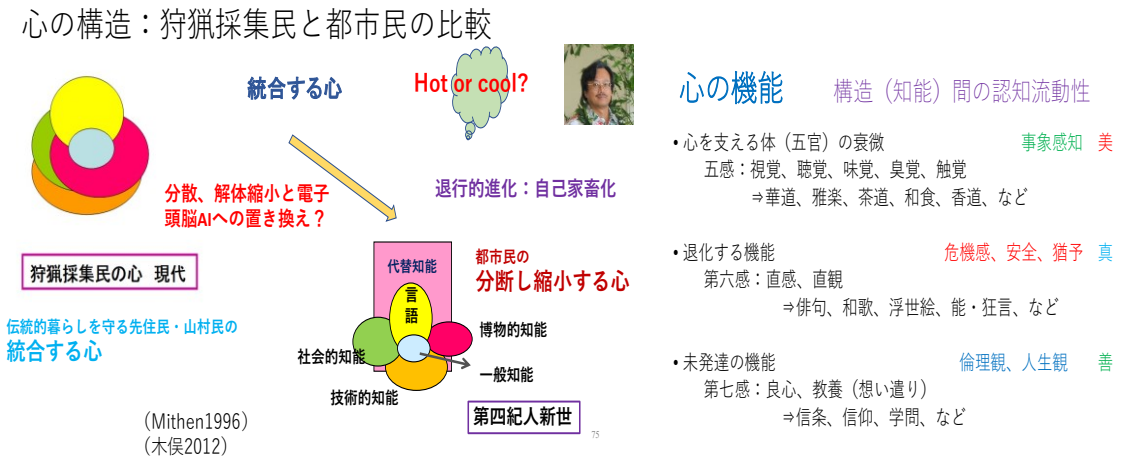

図 2. 心の構造と機能

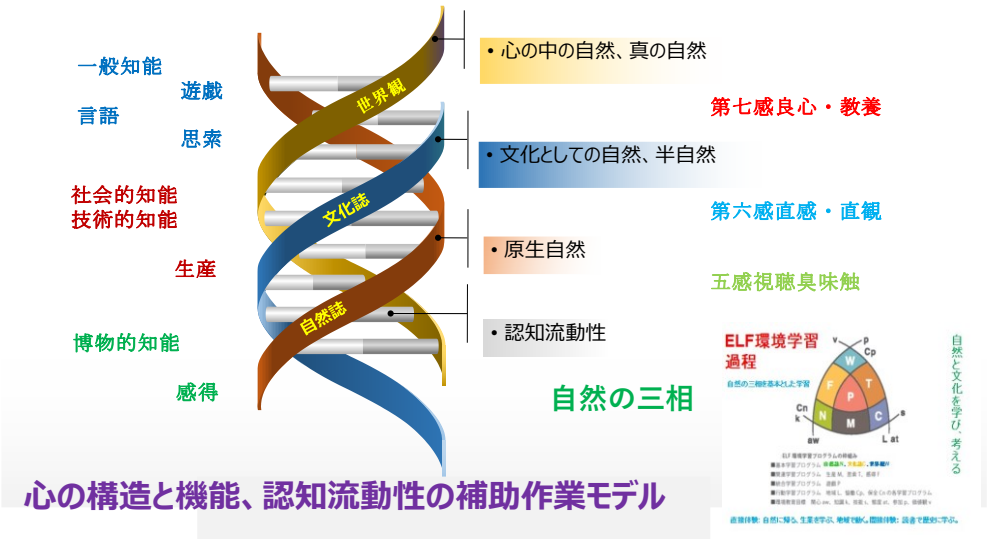

図 3. 心を構成する各知能をつなぎ、機能を作動させる認知流動性の補助作業モデル

心優しい日本人は、あなたの幸せや健康などを祈りあるいは願います、と言ってくださる。ぼくもほとんど意識せずに、この 2 語を使っていたようだ。しかし、数年前から、何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、日本人にとって、ぼくにとっても、それが自明なことなのか、疑問に思うようになった。人生で、力及ばずに苦しいことが起これば、日本人は何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、そうなのだろうか。

真に僭越ながら、神ならぬ身が、我が身に及ぼされた罪を許すこととは論理的にもできない。悪意をもって危害を加えられたら、反撃するのは当然だ。神仏でない人間が、悪意をもって攻撃する相手を許すことなど、あまりに僭越だ。でも、やり返す過程で憎悪に溺れれば、似て非なるとはいえ罪を犯して、意識せずして当事者以外の人々をも巻き込むだろう。復讐をしないのは自律して我慢するからだ。

しかし、心情的に他者の罪を恨み問うても、自らを浅ましいと思ってしまう心情は、一体どこから来るのだろうか。被害者が自らを責める心的外傷はどのような心の作用なのだろうか。加害者に反撃しても、心的外傷は直らないという心情、復讐を押しとどめて自傷するのはなぜなのだろうか。神仏に心の傷の治癒を祈り、願えば癒えるのだろうか。宗教に敬意をはらってはいるが、ぼくの信仰は自然にあり、アニミストだから、その祈りや願いの先は自然のカミガミであり、言い換えれば自然治癒、自分で治す、すなわち超克するということだろうか。我慢する、自律できる強い精神力を鍛えることだろうか。自問するばかりだ。

最近の日本人の多くは神仏、カミガミを畏れていない。増上慢は極まって、神童、神業、神泡、神対応、神回、・・・なんて不遜なのだろうか。ムラ社会の事はすでにかなり論考してきた（木俣 2015）。しかし、さらに心が凍り憑く事象が自らに起こったのだ。このことについて自傷しながらも、超克するために、さらに具体的事実に基づき、テキスト分析を用いて客観的に論考した。一方で、降矢静夫老師の山村賛美、自給知足の暮らしを対照して、心を洗うように比較研究することも同時に進めてきた。

ぼくは田中正造翁が求めた真の文明は生き物の文明と同じ概念だと思い、さらに生き物の文明への希望を探すために論考を深めたい。1）山村の景観・生態系と山村農人の心性の

美しさを降矢静夫師のはがきのテキスト分析で明らかにした。他方で、2）日本のムラ社会の形成過程について、自らの人生で体験してきた事実および多くの人々が田舎・都会暮らしで体験した証言（書籍、論文、書評、コメント、e-メールなど）を根拠資料としてテキスト分析などによってすでに詳細検証した（文福洞 2021、黍稷 2021、木俣 2021）。ムラ社会による集団的排除行為、ムラ撥撫は心に巣くう醜い犯罪だ。被害者が心的外傷後ストレス障害を治癒するには自律的に超克するしかない。山村農人に学び、美しい山村に希望を見出すために、これまで十分解くことができなかったこの課題に最期に当たって、明確な結論を示すように、挑むことにした。

ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生は学校や会社などでのいじめの構造と同じで、都会であれ、田舎であれ、閉鎖的な時空間で毒を充満させ、心的障害ストレス障害に長らく苦しませる。心的外傷後ストレス障害 PTSD を引きずり、悔しく苦痛であっても、感情に流されて行為しないように、自律制御できるように教養、想い遣りを磨くべきだろう。復讐心ではなく、犯罪者個人への反撃でもなく、ムラ社会とそれによって行われたムラ撥撫の罪を許さず、形成と発生のメカニズムを白日にさらして、その事象を告発する。属性は削除、個人情報保護、偏見・先入観を防いだ。個人の属性を記せば、心理的構造はより明瞭になるが、個人情報ではある。実名は示さずに、たんに記号 ABC で論ずるべきなのだろうか。被害者にすれば、犯罪者に対して容赦はいらないはずだ。罪を憎んで人を憎まずは、被害者の苦しみを黙殺する偽善だ。ぼくはもう老い先短いので、別稿では容赦しないで事実をありのままに記しておくことにした（木俣 2024）。

テレビ番組の「ドクターX」は小気味がよいので、珍しく毎回見ていた。そのエンディング曲は Ado の「阿修羅ちゃん」であった。群れを嫌い、自由気ままに生きる医者は好きだ。子供の頃に目標とした職業であった。Ado の歌集 CD『狂言』には「阿修羅ちゃん」ほか、共感する歌詞の歌が収められている。非常に速いテンポの歌にはとてもついてはいけないが、読める歌詞には著しく共感するのだ。お若い同類眷属がいた。中島みゆきの歌で、「麦の唄」や「ファイト！」には聞くたびに涙が出る。昼間に聞く荒井由実、夜に聞く中島みゆき、彼らの歌にどれだけ気持ちを支えられてきたことか。共感する画家ファン・ゴッホの作品をたくさん見て、テオへの手紙も読み、彼も阿修羅の眷属であったと思う。

人びとの心を分断し、貶め、 知性ある周りの人々や傍観者さえも毒に晒されると操られ同調者になってしまう。次は自分がいじめの対象者になることを怖れる。現実から抽出したこんなに面白い人生ゲームが 『鬼滅の刃』や『アシュラ』の主題に他ならない。ほとんどの人間にはとても信じられないことであるが、心に毒を持つばかりでなく、さらに良心を持たない人たちもいる。心理セラピストによれば、アメリカでは 4%が良心を未だに有していないという。 人間にとっては、良心は第七の感覚で人類史では、まだ進化の過程にある感覚である（スタウト,M. 2005）。

時々起こる感染症、現在は COVID-19 のパンデミックによるものであるが、この毒素は人間の心にも及び、隠れていた実に醜い心性を増幅し、露出させているのだ。禍福転じて反省し、現実を見つめ、心の構造と機能を整理して真の文明への移行準備をしたい。五感、直感・直観（第六感）を澄まして、大切に保ち、良心（第七感）を鍛える。苦境を乗り越えるには先人から学び、自律することだ。心の構造、知能を鍛錬して、人を傷つけず、疑心暗鬼に罹るのではなく、自らも傷つかない。師友を求め、学びを深めて人生への信念を鍛え、家族との信頼を育み、幸せになって良いのである。

第七感を発達させるためには表 1 にまとめたような負の感情を自制するトレーニングがいる。嫉妬 jealousy；嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけること。妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつける。羨望 envy；悪性の場合には、悪意を持って他者が持つ優れた事物への渇望、その対象がそれらを失うことへの願望となる。良性の場合には、昇華する方向で、社会的に認められない欲求が社会的に価値のある芸術・宗教活動に置換される。好敵手として目標に鍛錬する。保身 self-protection；自己・個人の存在を保つ。組織ムラ・ シ マ 組織の利害・損得を守る。身の安全や地位・名誉などを保つこと（広辞苑）。

表 1. 心理学用語

語彙			語義	特性
嫉妬	jealousy	嫉む	嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけること	第三者関係
		妬む	妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつける。	
羨望	envy	悪性、悪意	他者が持つ優れた事物への渇望、その対象がそれらを失うことへの願望。	二者関係
		良性、昇華	社会的に認められない欲求が社会的に価値のある芸術・宗教活動に置換されること（広辞苑）	好敵手として目標に鍛錬する。 代償行動（置き換え）
保身	self-protection	自己	身の安全や地位・名誉などを保つこと（広辞苑）	自己・個人の存在を保つ。
		組織ムラ・シマ		組織の利害・損得を守る。

地域共同社会で共生するように、原則的に食物や学びを自給知足するための方策を、真の文明にむけてゆっくりと堅実に準備する。生活に関わる、重層して蓄積してきた文化複合はさらに宗教、芸術、科学、産業、生業 真の文明への移行を保障する。環境観（心の構造）に目覚めたい。家族を支えているのは職業による収入だけではなく、収入にならない生業も必須の支えである。自分たちでできる仕事はささやかでも行ない、さらに不足することを地域共同社会に委託する。人間の心は世界の良き事象にも共感することができ、現代の文明を支えすべてを包み込むように統合する。家族や地域を越えて、歴史的時間や地理的空間を越えてでも協働することができる。

パンデミックは感染症の世界的な大流行を意味しているのだが、人口爆発も自然に対するパンデミックと同じような現象だ。農業生産の余剰を基盤税収にして、都市国の文明が起源して以後、さらに現代では巨大都市集住、人間の食料となる穀物など栽培植物や牛・豚や鶏など家畜の画一種・品種の個体数の激増も同様で、これらには病害虫や病原体が伴いパンデミックを引き起こす。 農耕地でのモノカルチャーや畜舎での多頭飼育などとして大集団を形成することが根本的な誘因だ、

ジャラルヴァンド（2022）は『サルと哲学者』で、「哲学について進化学はどう答えるか」と考察を述べている。彼の論理の基盤となる古典哲学の豊かな知識はヨーロッパの大学の基礎学習過程によるのだろう。こうした中で、いくつかの共感するあるいは気になる記述を摘要する。スピノザ（1632～1677）の汎神論では、神を信じていたが、神と自然は同一の

存在である。神は宇宙を構成する物質であり、一貫して神あるいは自然という概念を使っていた。人生の意味は宇宙、どうしても避けられないことがあり、なるようにしかならないという現実を受け入れるほどに、人間は自由になり心の平安を得ることができる。カミュ（1913～1960）が描いた、シーシュポスは人生に生きる価値があるならば、この世の繊細な無関心を理解しても、憂鬱よりも解放を感じる。自分だけが人生の主であり、生あるうちに人生を満喫することで、存在の不条理を克服しなければならない。誠心誠意の人生、存在を肯定しつつも、同胞に不正を犯したり不正を容認したりすることを拒否する人生は天からの報酬をもらわずとも意味のあるものだ。経験を否定しないことが、あらゆる無意味さに対する反逆でもある。

科学的には地球上の生命は主に三種類に分類される。真核生物、アーキア（原核生物）および細菌（原核生物）である。アーキアは 1970 年代後半まで存在すら知られていなかった。アーキアは分裂するたびに娘細胞が細菌を取り込み、細菌は内部で増殖し、真核細胞ができ、さらに藍藻が丸呑みされて、細胞内共生が生じ、真核生物から多細胞生物、植物の祖先ともなった。ぼくが十分に知らないうちに、急速に明かされる多くの知識がある。

最近、新たな遺伝子編集技術 CRISPR システムのメカニズムが解明され（2012)、例えれば遺伝子のハサミである。これによって、短期間で遺伝子を切り貼りでき、自然界に存在しない何物かができてしまう。実際に、この遺伝子組み換え技術は、安全性も確認されておらず、関連学会は技術的にモラトリアムしていたにもかかわらず、名誉心のために中国の研究者が 3 人の人間に適用した（2018～2019)。ぼくが学生の頃から敬意をもっていた J.B.S.ホールデンの予測によらず、遺伝子技術が急発展したことを、ジャラルヴァンドは繰り返し指摘している。しかし、遺伝学者でありながら全体論の立場をとるホールデンやぼくは遺伝子編集技術という還元論を、生き物に摘要することには同意できない。それは生き物ではなく化け物である。

上記に摘要したジャラルヴァンドの記述は現実である。他方で、田中（1968、2010）の描いた『妖怪人間ベム』はフィクションである。科学は目覚ましく発達しているが、人間の心は逆に衰えていると考えたマンストール博士によって、妖怪人間 3 人ベム、ベラ、ベロは人間の悪の心と戦うために造られた。彼らは「早く人間になりたい」と言う。アニメも見たが、邪悪な人間と戦いながら、良い人間になりたいと希望するのだろう。人間の悪と戦う後に望まれるその希望には非情理を感じた。『鬼滅の刃』の禰豆子は鬼になりきらず、兄の炭治郎も不死の鬼になることを最後まで拒絶した。

ジャラルヴァンドが紹介している Butler（1993）の“Parable of the Sower”も SF ディストピイア小説である。2024 年、崩壊寸前のアメリカに暮らす少女ローレンの物語である。気候変動により自然が破壊され、独裁的な大統領が統治し、外国企業は国家のように振舞う。防御塀の外では貧困が蔓延し、塀が崩壊してローレンの家族は殺されてしまう。ローレンはアースシード教団を創り、滅びゆく地球を離れ、新たな惑星を探す宿命を負う。

他方で、Wall-E は唯一地球で機能しているごみ処理ロボットの物語である（Disney and Pixar 2008)。汚染された地球から逃れて、2805 年には人間は世代宇宙船で生活していた。地球に帰還した彼らは再び農耕から文化的暮らしを始める。ぼくはこの物語も好きで、結局、人間は宇宙に将来を求めるのではなく、この地球に生きる未来を大切にすべきなのだ。

シと不死

宮崎駿（1983）の『シュナの旅』はチベットの民話をもとに再話した。ヒワビエを栽培する谷合の小国の後継者シュナが西方の豊穣の地を目指し、飢えを除く黄金の穀物を探索する。人買いをして畑を耕かせている神人の島から大麦を盗み出して、村の人間に伝えた。この神人の畑はナウシカが廃墟の町に見つけた庭と同じものだろうか。ともに詳細は不明であるが、恐らく神人は宇宙人であり、遺伝子編集したと思しきオオムギを巨人に栽培させていた。この物語は別の話として語られるべきであろう。おしまい、と閉じられている。

10 年後に描かれた宮崎駿（1993）の『風の谷のナウシカ』は火の 7 日間の戦争後 1000 年、停滞する人間社会を描いている。小難しいぼくの講義を理解してもらうために副教材としてよく引き合いに出した。今日からの千年間に起こることを想像させるような物語展開である。現代史で、科学者が何をしたのか、何をするのか、現実を象徴的に描いている。ナウシカは巨神兵オーマの名付け親になり、一緒に仕組まれた秘密のあるシュワの墓所の扉を閉じるために向かう。オーマは古エフタル語で無垢を意味する。浄化の神である墓所やその貯蔵庫である清浄な庭を守るのは土鬼僧会の博士たち、彼らは旧世界の人間が造った不死の番犬ヒドラ、死ぬこともできない化け物であった。ナウシカは言った、私たちの神は一枚の葉や一匹の蟲にすら宿っている、と。ナウシカと森の人セルムは腐海の秘密を解いたが、彼は言った、これは二人だけの秘密としておき、生きましょう、すべてをこの星にたくして、共に、と。秘密とは腐海が数千年をかけて不毛の大地を回復させたら、汚染された生き物は清浄な場所では生きられず、亡びるように定められていることである。この清浄な庭こそ、シュナで予告された別の話であると思われるが、ナウシカでも墓所の貯蔵庫とされる庭は、墓所が崩壊したのちに、どうなったかは語られていない。

阿修羅はシッタータ、オリオナエとともに宇宙創成の謎を解き明かそうとした。転輪王は宇宙の生成とともに存在し、すべてを見てきたと言う。いずこからか、永劫の門の向こうから、弥勒らが現れて、五十六億七千万年後に人々を救うと言ったが、弥勒の救済計画は失敗した。それでも、シ（死）は永劫の門の向こうから来て、彼岸に住む超越者は破滅への開発者として存在する。二千億年すら一片となす無限の時を支配する。ゼンゼン市 A 級市民は記号に還元されて保護され、永遠の安らぎを持つ。人間であるというが、スイミンシツで眠る実体のないパンチ・カードである。B 級市民はロボットである。アスタータ 50 には惑星開発委員会があり、宇宙に初めて神が姿を現した場所はトバツ市である。シの命を受けた計画のすべては惑星委員会の行動の結果である。阿修羅は問う、永遠に世界が続くのなら、わたしの戦いはいつ終わるのだ？すでに還る道は無い。また新たなる百億と千億の日々が始まる。おわり。

図 2 に六地蔵尊の並びを示した。善光寺では向かって左から天道、人間道、修羅道の三善趣、次いで畜生道、餓鬼道、地獄道の三悪趣である。泉龍寺では、天道、人間道、修羅道、続いて地獄道、餓鬼道、畜生道であり、両寺を比較すると、地獄道と畜生道の位置が異なっている。

トランス・パーソナル・エコロジーを主唱してきたフォックス（1990）は R.エイトキン老師の言葉を次のように引用している。世界の現状では、菩薩の理想こそ、われわれ人類が生きのびる唯一の希望である。いやそれは、どの生物の存続にとっても唯一の希望だろう。貪欲と憎しみと無知の三毒が、われわれの受け継いできた自然と文化を破壊しつつある。地球市民としてラディカルな菩薩の立場に立てないかぎり、われわれはまっとうな死さえ迎えられないだろう。

他者の内なる心毒を制する方法はない。自己の心毒は教養を高めることで自律制御できる。学ぶことを望む人は他者から教養を高める方法を受け取ることができる。しかし、他者に教養を伝える意思を示し手助けはできるが、他者に受容を求めることはできない。すべては個人の自由な所業にあり、当人が望むのなら誰もが阿修羅のごとく自ら励むしかない。アシュラの眷属は世界中にいたのだ。解脱はないかもしれない。天道に行きたいのなら、解脱は死後だが、阿修羅道にとどまるのなら、その心は不死だろう。ぼくの解脱に関する詳細な論理の解説はすでにしてある（木俣 2021）。

ぼくにも罪業が少しもないなどとは言えない。生きてきた中で自ら認識していなくても、それなりに他者を傷つけたこともあるだろう。従って、天道には転生できず、と言って人間道には転生したくはなく、もう一度、阿修羅道に転生する前に一休みして、天道の門近くの道端に咲く草花になり、天国に行く人たちを拍手で迎えたい。『はてしない物語』（エンデ 1979）は子供たちの誰かに読み継がれなければならない。そうした子供がいなくなれば、ホモ・サピエンス人間の物語はすでに終わっているのだ。

左）長野善光寺の六道地蔵尊：　天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道
右）狛江泉龍寺の六道地蔵大菩薩：　天道、人間道、修羅道、寄進者、地獄道、餓鬼道、畜生道
私見）天道、修羅道、人間道、畜生道、餓鬼道、地獄道

図 4. 六道地蔵尊

引用文献

Ado 2022、狂言、UNIVERSAL MUSIC LLC。
吾峠呼世晴 2016～2020、鬼滅の刃、集英社 2020、東京。
ジョージ秋山 1970～1971、アシュラ上巻・下巻、立風書房、東京。
ジョージ秋山 1972～1973、The Moon、復刊ドットコム 2019、東京。
Butler, O.E, 1993, Parable of the Sower, Headline Publishing Group, London, UK.
M.エンデ 1979、はてしない物語、訳、岩波書店、東京。

フォックス, W. 1990、星川淳訳 1994、トランスパーソナル・エコロジー：環境主義を越えて、平凡社、東京。
ひろさちや 2005、わたしの中の阿修羅、佼成出版社、東京。
岩田慶治 1986、人間・遊び・自然－東アジア世界の背景、日本放送出版協会、東京。
木俣美樹男 2005、巻頭言もう一つの阿修羅として、民族植物学ノオト 1：1。
光瀬龍・萩尾望都 1994、百億の昼と千億の夜、秋田書店、東京。
光瀬龍・萩尾望都 2022、百億の昼と千億の夜、河出書房新社、東京。
光瀬龍 2010、百億の昼と千億の夜、早川書房、東京。
ミズン,S. 1996、松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。S. Mithen, The Prehistory of the Mind; A Search for the Origins of Art, Religion and Science, Thames and Hudson Ltd., Kondon, UK.
宮崎駿 1983、シュナの旅、徳間書店、東京。
宮崎駿 1993、風の谷のナウシカ第 7 巻、徳間書店、東京。
宮沢賢治 1923、春と修羅、ゴマブックス 2016、東京。
中島みゆき 2000、2000 Singles MIYUKI NAKAJIMA, 瀬尾一三・井上堯之アレンジ、JASRAC。
MIYUKI NAKAJIMA 2016, 21st CENTURY BEST SELECTION 前途、YAMAHA MUSIC COMMUNICATIONS CO. LTD。
Padulosi, S. et al. 2022, Orphan Crops for Sustainable Food and Nutrition Security; Promoting Neglected and Underutilized Species, Routledge, New York, USA.
スタウト,M. 2005、木村博江訳 2012、良心をもたない人たち、草思社、東京。
スタマテアス,B. 2008、久世修平訳 2015、心に毒を持つ人たち、SB クリエイティブ、東京。
田中憲 2010、妖怪人間ベム、講談社、東京。
山折哲雄監修 1991、世界宗教大事典、平凡社、東京。

参考文献

木谷節子・中山ゆかり 2009、阿修羅展、ぴあ、東京。
いどきえり 2023、列車にのった阿修羅さん、土蔵に疎開してきた国宝、くもん出版、東京。

関連文献

木俣美樹男 2018、巻頭言、解きたい謎―西暦第 2 千年紀に生きる、民族植物学ノオト第 11 号：1。
木俣美樹男 2018、信仰の個人主義を探る―発端：科学への妄信を越えるために、民族植物学ノオト 第 11 号：56-62。
木俣美樹男 2019、巻頭言、商品ではない任意無償性への敬意、民族植物学ノオト第 12 号：1。
木俣美樹男 2019、先真文明時代への覚書 5、文明の野蛮へ退行、民族植物学ノオト第 12 号：17-36。
木俣美樹男 2020、巻頭言、老衰したこの国にも再生の春を希求する、民族植物学ノオト第 13 号：1- 2。
木俣美樹男 2021、巻頭言、素のままの美しい暮らしと持続可能な開発目標、民族植物学ノオト第 14 号：22-54。

木俣美樹男　2021、山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～、民族植物学ノオト第 14 号：52-75。
文福洞先斗　2021、日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析、民族植物学ノオト第 14 号：76-115。
黍稷農季人　2021、孤独と孤立～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能（電子版）、植物と人々の物館。
木俣美樹男　2021、環境学習原論～人世の核心；増補改訂版（電子版）、植物と人々の博物館。
黍稷農季人 2022、巻頭言人新世の姿形寡聞、民族植物学ノオト第 15 号：1。
木俣美樹男編　2022、降矢静夫光岑書簡集～最後の山村農人からの贈物、希望（電子版）、植物と人々の博物館。
黍稷農季人　2023、巻頭言：個人を確かめ、超えていく存在、民族植物学ノオト第 16 号：1。
木俣美樹男 2023、植物と人々の博物館小史、民族植物学ノオト第 16 号：47-93。
木俣美樹男 2023、随筆国際雑穀年 2023 への餞、雑穀研究 No.37:21-24。
木俣美樹男 2023、果てしない雑穀の物語、雑穀研究 No.38:35-37。
木俣美樹男 2023、雑穀は生物文化多様性豊かな食と農の文化残したい、女性のひろば通巻 529：47-51。
木俣美樹男 2023、巻頭言、生きている文化財―雑穀と家族農業に誇りある未来を、国際農林業協力 46（1）：1。
木俣美樹男 2023、2023 年は国際雑穀年～日本の雑穀街道文化を FAO 世界遺産に、木俣美樹 男さんインタビュー、つぶつぶ vol.15:2-4。
木俣美樹男 2022、日本雑穀のむら（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2024、雑穀街道普及会の顛末記～見捨てられた穀物への多くの感謝と少しの謝罪、民族植物学ノオト第 17 号：22-54。